恵の水

金子花帆
北せいら
中島美藍
中野桃
野田美紗樹
三谷空楽
渡邉心美

伝えたい大切な思い
美しい水俣の海を後世に

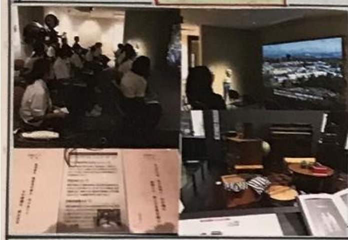
私たちの合志楓の森中学校は、昨年四月に開校した新設校である。菊池恵楓園に隣接しており、旧菊池医療刑務支所跡地に建てられた。恵楓園の方々の「人権教育の拠点」としてハンセン病問題について正しく理解し、恵楓園の歴史や自然を守って欲しい」。「ハンセン病の教訓をどう伝えていくか考えて行動して欲しい」という思いを大切にして、学びを深めている。

私たちは、七月に水俣病資料館を見学した。

リニューアルされた菊池恵楓園歴史資料館

そして、新しくリニューアルした菊池恵楓園歴史資料館も八月に見学した。二つの資料館を見学して、それぞれの歴史的背景や病気のこと、差別との闘いなど、深く学ぶことができた。そして、「正しく理解する事の大切さ」「教訓をどう伝えていくか」「このふるさとを誇りに思う気持ち」は共通しているんだと思った。

菊池恵楓園歴史資料館は増改築し、展示内容も見直して、今年五月に開館した。たくさんの人の心に響くような資料館にしたいと、七年前から構想が練られて、体験型で、メッセージ性の強い全体の構成になっている。私たちの宝物がもう一つ生まれた気がした。



吉永理巳子さん 吉永利夫さんに話を聞く

私たち一年生は、六月に「水俣に学ぶ」と題して、水俣病問題について学習した。その一環として、六月二十一日に水俣病資料館の語り部である吉永理巳子さんとご主人の吉永利夫さんに、差別に立ち向かう心と環境保全の取組という二つの視点から講話をしていただいた。実際の体験や家族の方の思いが伝わった。

吉永理巳子さんは、五歳の時、急性劇症型の水俣病で父を亡くした。漁師であった祖父も九年間寝たきりであったが、一九六五年に亡くなった。家族のことを話したくなくて、友だちを家に連れて来ることもなかった理巳子さん。四十年近く水俣病という声が聞こえてくると耳を塞いでいたそうだ。ある時本を読んで、チッソの廃水が原因とわかっていたのに止められなかった国、止められなかったチッソのことを知る。もっと早くに調査をすれば、症状や治療方法がわかっているのにそれすらやっていない事実を受け止めなければならないと思ったそうだ。その時初めて祖父と父のことを恥ずかしいと思っていた自分の差別性に気づいた。黙っていても何も変わらない。ふるさとと向き合って、差別の教訓をどう伝えるか考えなければならないと思った。「勇気を持って声を上げる事の大切さや人との関係性をつないでいくことが大事」という言葉が印象深かった。

吉永利夫さんは、水俣病患者さんたちとの出会いや関わりを通して、当事者の社会的な背景、市民のくらしをわかりやすく説明しながら、公害を二度と繰り返さないために、水俣病問題を語り継ぐ活動の意義について講話をしてくださった。水俣湾の仕切り網の一部や貝殻などが入った「水俣の箱」を準備していただき、○×クイズなども交えて、楽しく、わかりやすく話をされていた。実際に網の一部を触ると、少し海の匂いがして、水俣をより身近に感じることができた。「たくさんの人々に水俣を見てもらいたい。水俣でしか感じられないことがたくさんある。水俣湾を見ながら、生命を考えて欲しい」という言葉が印象深かった。水俣病問題についてより深く学ぶことができた。

水俣湾の仕切り網を触りました。○×ゲームもしました。

水俣病資料館　県環境センター

私たちは水俣病資料館、熊本県環境センターを見学した。そこで私たちは様々なことを学んだ。

水俣病が起こる前の水俣の様子や水俣病発生拡大、そして水俣病患者への補償までの歴史をパネルや映像、音声などの解説で詳しく知ることができた。資料館に入るとまずは、水俣湾が「魚湧く海」と呼ばれ、町にチッソができ、町が豊かに、そして賑やかになっていった時代の展示がある。奥に進むとシアタールームがあり、二十分から三十分程度の映像と音声で患者さんの思いなど分かりやすい説明を見聞きすることができた。また、水俣病による感覚障害（感覚」、感覚障害（温度覚」視野狭窄が体験できるコーナーや「永遠の記憶」という一面写真のコーナーもある。

その後、私たちは、熊本県環境センターに行った。そこで私たちは、SDGsや地球温暖化による影響などについて学んだ。体験型の分かりやすく学べるコーナーがあった。地球温暖化を進めないために私たちにできることを学ぶことができた。また、買い物の疑似体験を通して、ごみや二酸化炭素を減らすにはどうすればよいか、毎日の買い物や生活を見直すことができた。その他にも地球温暖化による気候変動シミュレーションの映像を見ることができるコーナーや温暖化による防災、農業、水産業、健康への影響を知ることができるコーナーがあってたくさん学ぶことができた。

TSMCの影響ある？　合志市の水環境

私たちは、水俣での学習をもとに合志市の水環境はどうなっているか合志市の水道課にインタビューをした。

〔Q〕TSMCの工場が菊陽町にできるが、大量の工場用水を使って地下水の水位低下につながらないのか。

〔A〕地下水の保全についてTSMC側と熊本県などで協議を続けており、TSMC側は水の回収・リサイクルシステムを導入するなどして採取した地下水の七十パーセント以上を循環利用し地下水に影響がないように努めていくそうだ。

〔Q〕水質検査はどのように行われているのか

〔A〕合志市における水質検査は検査項目や頻度、採水場所を決め毎月実施しており、場所は公園や公民館等の公共施設から採取している。

〔Q〕工場からの排水の検査はどのように行われているのか

〔A〕健康や環境に影響を及ぼす可能性のある物質を排出する施設を『特定事業場』と呼ぶ。下水道法及び水質汚濁防止法に基づき排出水の水質測定を行うように義務づけられている。

私達の住む合志市では年々人口が増えている分、水環境を守る事を心に留めて自分から水資源を大切にしていきたい。一人一人ができることを考えたい。

合志市のSDGS ゼロカーボンアクション

ゼロカーボンを目指した取組について、市の環境衛生課に話を聞いた。

合志市を含む熊本連携中枢都市圏で、地球温暖化対策実行計画を作っている。地球温暖化対策は単独の市町村だけでの取組では限界もあるため、都市圏全体で一体となって取り組むことが効果的である。合志市では都市圏の中で「エネルギーの地産地消」を目標に、太陽光発電設備を設置したりなど、再生可能エネルギーを導入したり、住民一人一人が省エネに取り組んでもらうように広報紙やホームページを活用して、住民や市内事業に向けて啓発に努めている。

市の「広報こうし八月号」には、「環境通信」として、家庭で出来るゼロカーボンアクションが載っている。「電灯はLED電球に替えましょう」「冷房は二十八℃を目安にしましょう」等の具体的行動が示してある。様々な環境保全の取組を知ることができた。目指せゼロカーボン！

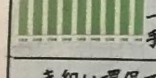
ストップ ゴミの増量

合志市のごみの状況について、環境衛生課に話を聞いた。

合志市の令和三年度のごみの年間排出量は一万五一一三トンで、令和二年度より三十五トン減少した。また、一人一日当たりのごみの量は五百五十グラムで、八グラム減少した。ごみが減った要因は、新型コロナの影響で一時的に増加した分が落ち着いてきたことが考えられる。

ごみの減量をするため、資源物になるものは資源物の袋で出す、生ごみを出す前には、ひとしぼりして水切りなどを行うなど、一手間加えることで、少しでもごみ減量化の取り組みを図っていきたい。

目指せ ごみの減量！



編集後記

私たちは、この新聞を通して水俣病患者の方々の想いや環境を大切にし、守ることの重要さについて学ぶことができた。自分たちが書いた新聞をより多くの人に読んでもらい、この新聞をきっかけに水俣病や環境のことについてより深く知ってもらおうと工夫した。新聞を作るために取材をしたり、みんなで協力したりして作ることが出来た。新聞を通して知らなかった事や偏見や決めつけていたことを改めていきたい。そして、水俣病だけでなく合志市の環境のことも知ってもらい、自分たちにできる取組みを考えて実行していきたい。

集団宿泊教室 in あしきた

合志楓の森中学校一年生は、七月十九日に芦北青少年の家に行った。当日は雨が降っていたため外での活動があまり出来なかったので、室内での活動になった。室内ではニュースポーツや流木ストラップ製作を行った。ニュースポーツでは、ペタンクやがが、シャッフルボードをクラスごとで回り楽しんだ。流木ストラップでは、色画用紙や木を使った活動をした。二日目の朝は、少し天候が良くなったためビーチでは、貝がらを拾ったり、水遊びをして楽しんだ。芦北の海の前で、クラスごとに記念撮影を行い、芦北の海を満喫することができた。